

# 市民的な資質をはぐくむための授業づくり —「言語活動」を手がかりにして—

松永 康史\* 中妻 雅彦\*\*

\*みよし市立北部小学校

\*\*教職実践講座

## Learning Plans for Developing Citizenship —An Analysis of Language Activities—

Yasushi MATSUNAGA\* and Masahiko NAKATSUMA\*\*

\*Hokubu Elementary school, Miyoshi 470-0207, Japan

\*\*Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 要 約

本稿は、『学習指導要領』で謳われた「言語活動の充実」を目指した授業実践を検討することで、社会科における「市民的な資質<sup>1</sup>」をはぐくむための授業づくりへの具体的な視点を与える。「市民的な資質」とは、体験的、問題解決的な学習により獲得された知識や技能と、社会や地域に対する問題の理解、判断によって生じる人間としての生き方につながる資質である。その資質が次なる学習を作り、その学習により新たな人間としての生き方につながる資質を生じさせるという螺旋的な学習のつながりによって生じる資質と捉えている。

そこで、第3学年及び第4学年において、自分たちの住んでいる地域社会(市や県)の学習を通して、「市民的な資質」を伸ばしたいと考えた。自分たちの住んでいる地域の社会生活の理解、地域社会の一員としての自覚、地域社会に対する誇りと愛情を育てるために、地域教材を活用しながら、言語活動を充実させていくという視点から実践し、考察した。その結果、「言語活動の充実」を目指した授業づくりへの具体的な課題が明らかとなった。

Keywords：言語活動 地域教材 市民的な資質

### 1. はじめに

「言語活動の充実」は、『学習指導要領』(2008)の大きな目玉として打ち出され、さまざまな実践事例が報告されている。『言語活動の充実に関する指導事例集<sup>2</sup>』や『言語活動モデル事例集<sup>3</sup>』など枚挙に遑がない。ここで一度、何のための言語活動かに立ち返る。言語活動を充実することそれ自体が目的ではなく、言語活動により、基礎的・基本的な知識及び技能の習得、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことを目指すことに留意する必要がある<sup>4</sup>。つまり、言語活動の充実は目的ではなく、規定する能力をはぐくむための手段として捉えておく必要がある。

本稿では、小学校第3学年、第4学年の地域教材を活

用した実践で、2年間に渡り言語活動の充実を図った実践を検討する。

### 2. 市民的な資質をはぐくむために

「市民的な資質」とは、体験的、問題解決的な学習により獲得された知識や技能と、社会や地域に対する問題の理解、判断によって生じる人間としての生き方につながる資質である。その資質が次なる学習を作り、その学習により新たな人間としての生き方につながる資質を生じさせるという螺旋的な学習のつながりによって生じる資質と捉えている。「公民(市民)的資質」の解釈については、議論の分かれるところであるが、小学校学習指導要領解説社会編では、「公民的資質とは、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社

会の形成者、すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質<sup>5)</sup>と記されている。市民・国民として行動する上で必要とされる資質は、人間としての生き方につながる資質につながるものと考え。第3学年及び第4学年の目標には、「地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解し、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。<sup>6)</sup>」と記されている。地域社会の一員としての「市民的な資質」を育むためには、体験的、問題解決的な学習により獲得された知識や技能をもとに、社会や地域に対する問題に対して、思考・判断する場面を意識的に取り入れ、表現していく授業を構想していく必要がある。そのことは、学習指導要領（2008）の改善の基本方針に「社会事象の意味や働きを多面的に・多角的に考え、公正に判断できるようにするとともに社会的な見方や考え方が次第に養われるようにする。<sup>7)</sup>」ことが挙げられたことから分かる。すなわち、子どもたちが主体的に思考・判断・表現する力を育成する学習への転換が求められている。その能力を育むための手段として、謳われたのが「言語活動の充実」である。

思考力・判断力・表現力の育成に関して、『『説明』を軸に社会科の授業を構成していくことで、考え、判断し、表現する一連の活動を保証することができ、『思考力・判断力・表現力』を育成することができる<sup>8)</sup>』という論もある。子ども自身が説明を行うことが、つまり「ある具体的な事例における問題に対して、これまで既知の知識や技能、調べた情報を取捨選択しながら関連付けて考えたり、まとめたりし、最も適している社会的見方・考え方を判断して組み立て、表現することである。<sup>9)</sup>」そのことも念頭に置き、言語活動を充実させるため、次の3点の言語活動に重点をおき、実践していくことにした<sup>10)</sup>。

**ア 観察・調査したことを的確に記録する表現活動**（観察・調査して再確認したり新たに発見したりした事実を的確に記録し、それを手がかりとして体験を振り返り、その意味を考え、絵や図、自分の言葉などで表現する活動の工夫）

記録用に工夫したワークシートを準備することや文型を示して書き方を提示する。また、授業感想をノートに書く活動を続ける。それらを通して、事実認識とそれに対する解釈、意味づけを確かなものにしていく。

**イ 比較・関連付け、総合しながら再構成する表現活動**（比較するために、事象と事象を比べ、違いや共通点を見つけ出すための工夫。関連付けるためには、人間相互の関連などの意味、人々の願いと社会的な行為との関係などに着目して、分析的に考えを深めていくための工夫。総合するためには、全体としてまとめてみると何が言えるのかを考えるための工夫。）

調査したことを出し合い、話し合い活動を行う中で、つながりを意識した板書を行う。また、スピーチ活動を通して、友達の体験を知り、自分の体験と比べ発表することで、表現力を高める。

**ウ 調べたことや考えを伝え合う表現活動**（互いの考えのやりとりを充実させ、一人一人の考えを深めていくための工夫）

調査したことをもとに、自分の考えを学級で話し合う機会を多く設定する。さらに、学習指導要領における、中学年の態度に関する目標である「地域の一員としての自覚をもつこと」にもつながるよう、地域に発信する活動を行う。

### 3. 授業実践①

#### (1) 授業の対象

・H小学校3年生 36名

#### (2) 単元構想

単元構想については、〈資料1〉のとおりである。

#### (3) 実践

5月に社会科「学校のまわり」で探検を行い、学校周辺の様子から、子どもはいくつかの店があることを知った。そこで、みんなの家ではどの店でよく買い物をするのか知りたいということになり、調べることにした。1週間、自分の家庭では、どの店でどんなものを買ったか調査をした。調査には、日にち、店名、買ったもの、気づいたこと考えたことを記録できるワークシートを作成し、活用した（言語活動ア）。児童Aは、1週間に3日間買い物をしていることや、決まった店によく行くことに気づいた。そこで、児童Aの気づきを学級全体に広げ、グラフ化（言語活動ア）し、集計すると、児童Aが行った店（スーパーB）を他の家でも多く利用していることが分かった。さらにスーパーBを取り上げ、どうしてその店に行く人が多いのか、買う人の立場から予想を立てることにした。児童Aは、商品が安いこと、品揃えが豊富なこと、家から近いこと、店が広いこと、商品が新鮮なことの5点を意欲的に予想した。次に、予想したことを確かめるため、見学に出かけた。見学では、予想したことを確かめたいという思いが強く、児童Aだけでなく、多くの子が意欲的に店内を見て周り、メモをとることができた。

見学後は、記録したメモをもとに、ノートに各自でまとめを行った。5月の「学校のまわり」の学習で、メモだけではどのように発表したらいのか自信がもてない子が多いように感じたため、メモを文章にして読むことで、自信をもって発表できるようにした。そこで、ノートのまとめ方として次のような文型を提示した。○わたしは～の～について調べました。○～(方



商品を置く場所がよいと、客として買いやすいという児童Aの思いを広げる発言をした。

(授業記録より抜粋)

児A：(前略) パンのとなりにジャムがあることが分かりました。ほくは、もっと違う場所にあると思っていました。

C1：Aさんにつけ足して、他の場所にもあったけど、わたしもパンのとなりにジャムがあるのを見ました。

T：どうして、パンのとなりにあるんだろうね。

C2：ジャムはパンにつけるから、パンの近くに置いてあると思う。

C3：Aさんとちょっとちがって、ほくは、野菜が新鮮かどうか見に行ったんだけど、野菜コーナーにドレッシングも置いてありました。

C4：ドレッシングも野菜につけるからだと思います。

C5：パンを買う時に、ジャムも一緒に買えるからいい。(下線部は、話型を使用している箇所)

〈資料3 見学して分かったことの出し合い〉

ジャムは、パンにぬるからパンの横において、取りやすくしていると分かりました。サービスを考えてやっていることが分かりました。

〈資料4 児童Aのノート〉

出し合い後の児童Aのノート〈資料4〉から、友達の見聞を聞き、商品を置く場所の理由を確認していることが分かる(言語活動イ)。また、C1の「わたしも～があるのを見ました。」という発言により、児童Aは、自分と同じ意見の子がいたことにますます安心感を覚えたのではないと思われる。

その後、今度は売る側としての視点から、学習を進めることにした。店の工夫を探しに2回目の見学をし、1回目の見学で身につけた方法で、取材メモを取り(言語活動ア)、分かったことを発表する(言語活動ウ)授業へと展開した。2回目の見学<sup>11</sup>では、店側の視点をもって行い、バックヤードを見たり、店長さんから直接話を聞いたり、インタビューを進んで行ったりした。見学後の授業では、新鮮な商品を販売する工夫として、「レジのバーコードで、消費期限をチェックできるようにしていること」や「魚は痛まないように氷水に浸してあること」「店に来た野菜は、バックヤードの冷蔵庫で冷やされていること」「野菜コーナーのたなの上には、電源があり、しおれないように、水が噴霧されること」が次々と出てきた。また、魚が売れなかった場合は、値段をどんどん下げること、それでも売れない場合は、捨ててしまうことを堂々と発表し、もったいないけど、新鮮なものを売るには仕方がないという自分の思いを強調する意見も出たりするようになった。出し合い後の児童Aのノート〈資料5〉を見ると、「びっくりしました」という自分の気持ちから書き出し、分かったことを確認している。また、たくさんの客が来る理由を改めて予想している(言語活動イ)。最後には、まだ、自分の調べが足りていないことを書き記すなど、調べたことをみんなで学ぶことの楽しさと共に、調べることへの意欲が伝わってくる。

ほくの知らないことがたくさん出てきて、びっくりしました。スーパーBは、新せんなものを売っていることが分かりました。たぶん、みんなにおいしく食べてもらいたいから、新せんなものしか売らないんだと思います。

それと、スーパーBは毎日、新しいことをやっているからお客が来るとおもいます。目の高さにも気をつけて商品をならべているなんてすごいです。スーパーBは、工夫しているところがたくさんあることが分かったよ。スーパーBには、まだ、ほくたちの知らないところがあると思います。

〈資料5 児童Aのノート〉

2回目の見学から調べたことを出し合ったが、もっと知りたいことが出てきたため、手紙に書き、店長さんに聞くことにした。店長への手紙は、次のような文型を提示し、学習したことを確認しながら、書くことができた〈資料6〉。○店長さんへ○見学させていただき、ありがとうございます。(お礼) ○まだ、分からないことがあるので教えてください。(依頼) 1つ目は～。2つ目は～。○よろしくお願いします。(あいさつ) 子どもたちは、本当にスーパーBから返事が来るか楽しみにしていた。

店長さんへ

2回も見学させていただき、ありがとうございます。スーパーBのことがいろいろ分かってきました。しかし、まだ分からないことがあるので教えてください。1つ目はねだんのことです。他の店より安いと思ったのですが、どうして安くできるのですか。2つ目は、スーパーBは、お客さんが多くて人気があると思ったのですが、店長さんは人気のひみつは何だと思えますか。3つ目は、ちゅう車場には何台とめることができますか。よろしくお願いします。

(下線部は、文型を使用している箇所)

〈資料6 児童Aの書いた手紙〉

その後、店長さんからビデオレターが届いた。手紙の返事が来たので、子どもたちは喜んでビデオレターを見た。ビデオレターを繰り返し見て、質問に対する答えをノートにメモしていった(言語活動ア)。そのときメモしたノートを見ると、「質問→答え」と矢印を使って、自分で見やすいノートを書こうとしていることがうかがえた。その後、今までの学習を振り返り、買う人の願いと売る人の工夫のつながりを考えた。買う側と売る側の関連付けをねらった(言語活動イ)。このことは、学習指導要領の中に、強調されている事柄である。そこで、客が店を使う理由と店の工夫を発表し、カードの色を分けて書き出すことで振り返った。そこにつながりがあるのかを、視覚的にも捉えやすいように線で結びつける板書の工夫を試みた<sup>12</sup>。売る側は、買う側の期待に応えられるよう工夫し、買う側は、売る側の工夫を喜び、店を利用することを板書からも気づいた。その結果、児童Aのノート〈資料7〉を見ると、「助け合って生きている」という表現を使い、改めてつながりに気づいていることが分かる。また、下線部の「お店がたつのは、お客さんのことも考えていること」という表現は、単純に売る側がもうけだけを考えてやっているわけではないことに気づいたか、あるいは、売る側は客によって支えられていることに気

づいたのではないかと推測する。

お店の人は、お客のやってほしいことをやっているの、すごいと思いました。お客とお店は、助け合って生きているということを知りました。だから、びっくりしました。お店がたつのは、お客さんのことも考えていることが分かりました。

〈資料7 児童Aのノート〉

買う側と売る側のつながりを学習した後、地域に生きる子どもがスーパーBをとにもよくしていけるようはたらきかけたい旨を店長に話し、子どもへの問題提起を依頼した。すると、店長から「お客様の声カード」があることやお客様が喜んで買い物をしていただけるようなアイデアを募集するというビデオレターが届いた。

それを見た子どもたちは、「お客様の声カード」〈資料8〉を書きたいと意欲的で、店に対する意見を発信することになった(言語活動ウ)。これまでの学習のまとめとして、買う側の立場になってそれぞれの考えを発表し、カードに書いていった。以前、手紙の書き方を学習していたため、お礼の言葉やお願いの言葉も進んで書いていくことができた。

ぼくは、スーパーBを見学して、お客がしょう品をとりやすいようにならべてあることを知りました。スーパーBにやってほしいことは、広くにわりびきけんをだしてほしいということです。りゅうは高いしょう品が安くなるからです。よろしくお願いします。

〈資料8 お客様の声カード〉

児童Aは、スーパーBを見学して、客が商品を取りやすいように並べてあることを知ったことや、チラシに割引券をつけてほしいということを夢中になって書いた。その他にも、資料9のように、それぞれの子どもがお客様カードへ積極的に意見を書いた。C1は、背が低い子どもでは、アイスを取りにくいという子どもならではの視点でアイデアを出している。C2、C3は、待ち時間をなるべくすくなくするためのアイデアとして、レジの工夫を意見として出している。C4は、新鮮な物を売るために売れ残ったものを捨てているということ、これまでの学習で知っていたため、それを捨てずに有効利用できるアイデアを出していることが分かる。子どもは、店に対して意見を発信できたことで、「地域のみんなで地域の店を作っていく」という地域の一員としての自覚をもつことにもつながっていったと思われる。

- ・小さい子どもはアイスに手が届かないので、台を置いてほしい。(C1)
- ・お客さんが多くて混むので、レジを空けないようにしてほしい。(C2)
- ・お客さんが多いので、セルフレジをふやしてほしい。(C3)
- ・売れ残りの食べ物は捨てるのもったいないので、肥料にしたらよい。(C4)

〈資料9 お客さまの声カードへ書いた意見の一部〉

その後、子どもが書いた「お客様の声カード」は、店に届けられた。子どもは、自分の意見でスーパーB

をより利用しやすいスーパーに変えられるかもしれないと期待に胸を躍らせていた。子どもの意見の一つでも、採用されれば幸いと願ったが、スーパーBの店長が異動されたこともあり、その後、子どもの意見がどのようにスーパーBで反映されていったかを追究できなかったことが心残りである。自分の意見がどのように受け止められ、どのように跳ね返ってくるのかを実感できた時、本当に地域の中で店と一緒に生きていることを実感できたのだと考える。しかし、今も子どもの多くが、スーパーBを利用していることに変わりはない。そして、今度は一消費者として、スーパーBに備え付けられている「お客様の声カード」に記入することを期待する。

ところで、本校では、毎週1回はスピーチ活動(ことばの教育)を行っている。この活動によって育てられた力が、社会科学習での討論や話し合いを豊かなものにすると考えるからである。本学級では、社会科の授業を受けて、「買い物」をテーマに行ってきた。事前にスピーチの筋となる文章が書かれたワークシートを用意し、子どもが作文をしやすいように工夫した。また、子どもの言葉遣いや表現の仕方について、朱書きをしたり言葉かけをしたりして、励まし続けた。手立てとして、理由を順番に話すとき、「一つ目は～」、「二つ目は～」と指を出して話すことで相手を意識して読めるように助言した。児童Aは、原稿を見ながらではあるが、指も使い堂々と発表することができた。最後の感想で「ぼく以外にも同じような体験をしている人がいて、ぼくだけじゃなくてよかった」と満面の笑みで感想を述べ、スピーチを終えた。自分の体験をみんなの前で語り、同じような体験を他の人も体験していることを聞いたことで、安心感や発表してよかったという心地よさが体験できたのではないかと考える。

#### 4. 授業実践②

##### (1) 授業の対象

・H小学校4年生 36名

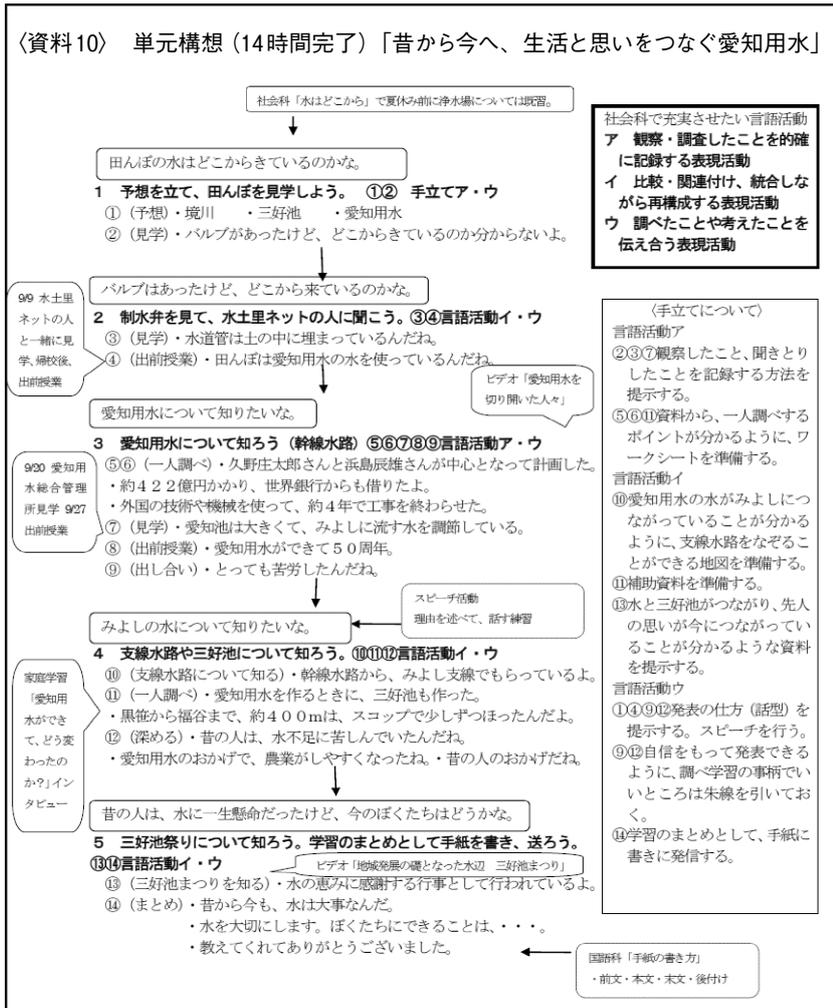
##### (2) 単元構想

単元構想については〈資料10〉のとおりである。

##### (3) 実践

昨年度に引き続き、本校では、スピーチ活動(ことばの教育)を継続している。

4年生になり、子どもたちは、生活飲料用水が浄水場から各家庭に届くことを学習した。そこで子どもたちは、田んぼの水はどこから来ているのだろうかという疑問を抱いた。まず、生活経験をもとに、予想を出し合った(言語活動ウ)〈資料11〉。C5の意見から、実際に田んぼに行けば、どこから水が来ているか分かる



だろうということになり、田んぼを見学することにした。予想の話し合い後の児童Aは、自分の生活経験をもとにした発表ができたことを喜びと感じていることとC5の意見に驚いたことを書き記しているのは、大きな進歩である〈資料12〉。

(授業記録より抜粋)

C1: ぼくは境川から来ていると思います。境川のそばには、たくさん田んぼがあるからです。

C2: 付け足して、田んぼの水は飲み水じゃないから、川の水でよいと思います。

児A: ぼくは、用水路が田んぼの近くにあるのを見たことあるので、用水路だと思います。

C3: 私は、飲み水と同じように浄水場から来ていると思います。

C4: ぼくは、雨水をためておいて、使っていると思います。

C5: 私は、地下水だと思います。田んぼに蛇口があって蛇口は土にささっていたからです。

C4: C5さんの意見を聞いて、やっぱり地下水かなと思いました。

〈資料11 予想したことの出し合い〉

今日は、発表できてよかったです。ぼくは、C5さんの意見を聞いてびっくりしました。ぼくもそういう発表ができるといいなと思います。

〈資料12 児童Aのノート〉

実際に田んぼを見学した結果、蛇口は見つかったが、その水が地下水かどうかは分からなかった。そこ

で、子どもたちに田んぼの水の専門家として水土里ネット<sup>13</sup>の人を紹介し、聞いてみることにした。子どもたちは、水土里ネットの人から、蛇口が地下で水道管につながり、愛知用水から来ていることを知った。今も地下水を利用している田んぼがあることも知った。また、水の量を調節する制水弁を見学できた。授業後の児童Aの感想を見てみると、疑問が解決した喜びと愛知用水の水源である牧尾ダムに興味が高まっていることが分かった。このように外部講師や見学を通して、愛知用水から水が来ていることを知った子どもたちは、児童A同様、愛知用水について詳しく知りたいという思いが高まり、調べ学習へと発展した。

副読本「かがやく大愛知<sup>14</sup>」、パンフレット<sup>15</sup>を使用した調べ学習、愛知用水総合管理所の見学<sup>16</sup>、総合管理所の方の出前授業により、愛知用水ができた経緯や当時の苦勞、愛知用水50周年を迎えたことなどを学習した。また、教室には、中日新聞が特集した愛知用水50周年の記事<sup>17</sup>を掲示した。

愛知用水が知多半島の先まで水を届けていることは分かったが、みよしの水は愛知用水からどのようにして届くのか、まだ疑問は解決できずにいた。そこで、支線水路の地図<sup>18</sup>をもとに、みよし支線の色鉛筆でなぞ

(授業記録より抜粋)

- C1: どうして、みよしに愛知用水を引いたかという、知多半島の人みよしの人でも干ばつが起こると、水がなくなるし、用水だと水はからからになることはないから、みよしの人農業をちゃんとできるからだと思います。
- C2: でも、みよしにはため池をいっぱい作っていたと思います。
- C3: でも、実際に干ばつがあって、水に困っていました。
- T: 実際に起こったの? 何で調べた?
- C3: 「みよし」です。
- C4: あまりにも 水に困っていたから、神様をよんで雨をふらせてくれと頼んで、雨が降ったら祭りをしていました。
- T: 本当? 何に書いてあったの?
- C4: 「みよしの民俗」です。(ざわざわとなり、みんなが資料を探し始める)
- T: みんな知りたいの? じゃあ、見てみよう。
- C4: (資料を音読する)
- T: すごいところから見つけてきてくれたね。資料をちゃんとすみずみまで読んでいたんだね。
- C5: つけ足して、みよしではよく雨乞いをしていました。雨が降ると、よく映画を見に行っていたそうです。
- T: 実際にインタビューしてきた人もいたよね。
- C6: おじいちゃんに聞いたら、ため池の水を使っていたと言っていました。
- C7: 親戚の人に聞いたら、昔は境川から水をもってきて使っていたそうです。
- C4: やっぱ、日照りが続くと困っていたと言っていました。
- C8: おじいさんに聞いたんだけど、ため池や湧水を使っていたけど、水の取り合いをしていたと言っていました。

〈資料13 用水を引いた理由の話し合い〉

る(言語活動ア)ことで、水の流れを追うことができた。みよしの水について、支線水路を造るに至った経緯など、もっと詳しく知りたいと考え、再度調べ学習をすることになった。資料として、副読本「みよし<sup>19)</sup>」と「三好の民俗<sup>20)</sup>」「三好町誌<sup>21)</sup>」「新屋のあゆみ<sup>22)</sup>」(「みよし」以外の資料は、子どもが読みやすいように教師が書き直したもの)を提示した。時間を決め、用水を引くために尽力した人や工事の様子、用水が来る前のくらしについて一人調べ(言語活動ア)を行った。また、家庭学習で農家の人に愛知用水についてのインタビューを行った。児童Aは、用水を引くため尽力した久野源蔵や工事の様子について調べることができた。

調べ学習後の話し合い(言語活動ウ)の授業では、多くの子供が一人調べの際に活用したワークシートをもとに、久野源蔵や工事の様子について発表することができた。工事の様子が明らかになるにつれ、「どうして大変な思いをしてみよしに用水を引いたのか」という疑問が出てきた。ある児童は「ため池の水だけでは、いつかなくなってしまうのではないか」と考え、ある児童は「農業の水はため池の水でよいと思うから、どうしてみよしに用水を引いたのか疑問だ」と考えた。そこで、この疑問について話し合うことにした(資料13)。C3やC4は、どの資料から調べたのかもはっきりと答えていることが分かる。また、C4の調べたことは、本当なのかとみんなが資料にもどって調べ直す(言語活動イ)きっかけになった。児童Aも、一目散に資料を開いて確認していた。また、昨年度からインタビューをやってきていたため、聞いてきたことを堂々と発表することができ、資料で知ったことの裏付けとなった。その後、みよしに用水が来た時の、農家の人の気持ちを想像し、発表した。どうして用水を引いたのか疑問だと考えていた児童は、「みよしでも干ばつがあることを知りました。ため池の水だけじゃだめだということも分かりました」と授業感想を述べていた。

その後、先人が苦勞して引いた水の恵みに感謝する「三好池まつり<sup>23)</sup>」が今でも行われていることを知り、昔から今へ生活や思いが繋がっていることをさらに実感した。同時に、水の大切さと自分たちの生活を振り返るきっかけとなった。単元のまとめとして、今回の学習から学んだことや感想をお世話になった水土里ネットや愛知用水総合管理所の方へ手紙(言語活動ウ)としてしたため、送付した。水土里ネットでは、出前授業をはじめ、手紙をもらったことなどを、全国水土里ネットのホームページ上の各地の水土里ネット活動情報で記事として取り上げていただいた。本単元を終えて、児童Aのノートから、調べる楽しさを改めて感じていることが分かる(資料14)。予想を立て、調べ、話し合いで深めるといった流れの活動が児童Aにとって心地よいものとなったからだと思います。

ほくは、最初、田んぼの水は、どこからきているのかから始まって、愛知用水のことを勉強してきました。(中略)愛知用水ができるまで大変なことなどたくさん知りました。(中略)みよしの用水について調べて、愛知用水の勉強が終わったので、もっと調べたいと思いました。だけど、調べたり、見学したりして楽しかったです。

〈資料14 児童Aのノート〉

## 5 成果と課題

### (1) 実践前の抽出児A

事前のアンケートでは、地域の人々や生活について調べることに、発表したり、話し合ったりすることにおいて、「きらい」と回答し、消極的な態度であった。自分から積極的に発表しようという姿勢はあまり見られず、聞くことに終始することが多かった。見学して分かったことを細かく記録することができず、自分の考えをもてないでいた。その一方で、指示したことに対して、まじめに取り組むことができた。教師の話もよく聞くことができた。しかし、話し手として消極的であるため、自分の考えを友達に聞いてもらったり、確

認したりすることができなかつた。そこで、今回の学習を通して、自信をつけて発表できるようになってほしい、また、自分の考えをしっかりともてるような記録の取り方や表現方法を身につけてほしいと願った。

### (2) 児童Aの変容

自分の考えや発表に自信をもてないことが多かった児童Aが、地域学習の終わりには、調べてきたことを、ワークシートやノートにまとめていくことで、授業感想を詳しく書けるようになり、授業中進んで思いを伝えようと挙手することが多くできるようになった。「調べたことを発表することが好きですか」、「話し合いは好きですか」の質問については、「きれい」と回答していた児童Aが、実践終了後には「すき」という回答が見られるようになった。児童Aにとって、自分から反対意見を出すことはまだまだ容易ではなく、ためらう姿も見受けられるが、調べたことや考えたことをみんなと話し合いたいという気持ちに変わった。それは、予想して調べたことをメモに書き、まとめ、発表する場を重ねていくことで、次第に自信をつけていったからであると思われる。

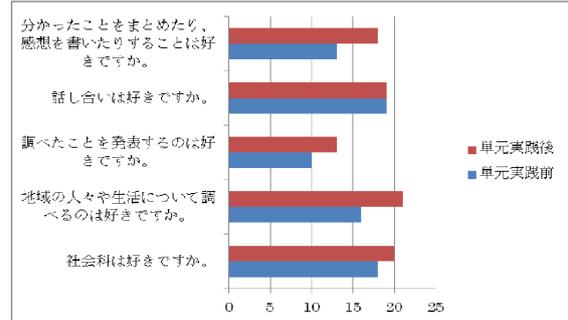
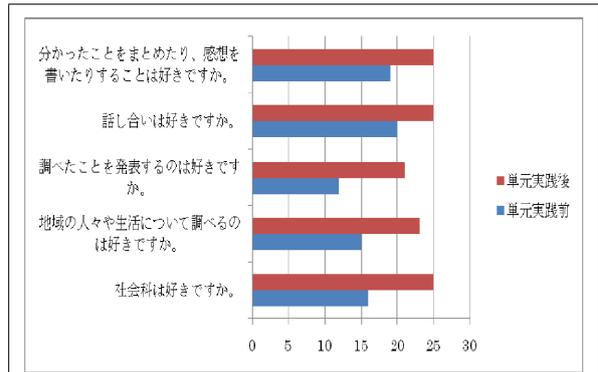
### (3) 全体の変容

発表や話し合いが好きになったのは児童Aだけではない。全体の変容もアンケートに表れている。実践の前後に、アンケートを実施した〈資料15〉。どの項目を見ても「すき」「とてもすき」と回答した人数が増えていることが分かる。調べたり、発表したりすることに少しずつではあるが自信をつけてきたため、好きになってきたのではないかと考えられる。さらに、身近な地域教材を単元構想に取り入れることが、子どもにとって生き生きと調べ、学び、表現できる姿につながることも実感できた。

### (4) 言語活動を通して

言語活動アの3年生実践では、買い物調査のワークシートに調べたことを書き記すことで、自分の家庭の実態を再確認することができた。また、文型を示しノートのまとめ方を提示したことで、見学メモを文章化し、調べたことを伝えることにつながった。書きやすいワークシートの準備やまとめ方を提示することで、記録する活動が充実したと考える。また、授業感想を書くことは、習慣化することにより、書く量も増え、考えや気持ちを抵抗なく表現できるようになってきたととらえられる。

言語活動イの3年生実践では、買い物調査したことをグラフ化することで、他の家庭との比較ができ、どの店がよく使われているのかという新たな発見があった。つながりを意識した板書をするすることで、なんとなくつながっていた買う側と売る側のつながりがはつき



※グラフは、「すき」または「とてもすき」と回答した子の人数を示している。

〈資料15 3年生実践(上)・4年生実践(下)社会科に関するアンケート結果<sup>24)</sup>〉

りと視覚的に捉えられ、両者を関連付け、その関連を再構築するのに有効であったと考える。4年生実践では、資料・見学・インタビューで分かったことをもとにテーマを設定し話し合うことが、関連付け、再構築するのに有効であったと考える。また、スピーチで体験を話したり、聞いたりすることは、自分と他者の体験を比べ、自分を振り返ることにつながった。

言語活動ウの3年生実践では、学級内での話し合い活動にとどまらず、地域の店に向けて発信、受信することができた。ビデオレターやお客様カードという媒体を使うことで可能となった。お客様カードは、実際に地域に生きる子どもたちが、直接お店へ提言することで、店はあるだけではなく、ともに作っていくものなのだという体験をすることができた。4年生実践では、話し合い活動を通して、疑問を解決していくことができた。また、地域の先人の苦勞を知るとともに、自分たちの生活を振り返ることができた。水土里ネットや総合管理所の方と交流することができ、地域の方へのインタビューもできた。このことで、地域に生きてきた人々の願いと人間の行為を関連付けるとともに、それが現代に脈々とつながっていることを実感することができた。これらは、子どもたちが理解したことをもとに、考えを伝え合う活動を充実できたと考える。中学年に身につけさせたい「地域の一人としての意識づけ」にもつながった。

## (5) 成果

言語活動の充実を手立てとして、単元を構想し、実践することで、思考力・判断力・表現力を育てるとともに、身近な地域の事象に対して直接働きかけたり、先人の願いや行為を理解したりすることで、現代につながる社会とこれからの社会への生き方を考える機会となった。このことにより、現代社会の事象の改善をはかる批判的なものの見方を獲得しつつ、地域社会に働きかける「市民的な資質」の基礎を養うことにつながった。

## (6) 課題

本実践では、授業外でスピーチ活動を行うと同時に、授業の中でも文型を示すなどの「ことばの教育」を行ってきたが、まだまだ型を使う段階にとどまっている。豊かに言語を使い、子どもの生活実感と切り結んだ言葉による学習活動への一歩を踏み出したにすぎないと思う。繰り返しになるが、日常的なことばの学習を保障する過程や学習環境の構成が必要となる。

言語活動アにおいては、ワークシートの工夫や思考したことを表現する「ノートづくり」がさらなる課題である。言語活動イにおいては、一店舗の見学に留まったため、他店舗を調査することにより比較することができなかった。多店舗との比較により、消費者としての資質をより養うことも可能となるだろう。言語活動ウにおいては、考えを伝え合う対象が、子ども同士にとどまらず、販売者、地域の事業者といった社会へ働きかけた点は資質を養うに有効だと考えるが、働きかけた以上、その受け止められ方とその後までを発信者として確かめることが必要である。つまり一方からの伝えるではなく「伝え合う」活動が、社会のだれかと問題を共有し、一緒に行動し、よりよい社会を実現しようとする「市民的な資質」につながるであろう。

以上の具体的な課題を踏まえ、言語活動の充実を目指したさらなる授業構想と実践が期待される。

## 註

- 1 中妻雅彦「21世紀の社会科学力」—『希望学』を手がかりに—（愛知教育大学教育創造開発機構紀要 vol. 3 105頁～111頁）
- 2 文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集』（2010）
- 3 水戸部修治編『言語活動モデル事例集』（教育開発研究所2011）
- 4 文部科学省初等中等教育局教育課程課「言語活動の充実と授業改善」（文部科学省『初等教育資料874号』東洋館出版社2011）
- 5 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』（2008、12頁）
- 6 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』（2008、18頁）
- 7 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』（2008、12頁）
- 8 小原友行編『思考力・判断力・表現力』をつける社会科デザイン 小学校編』（明治図書出版株式会社2009、41頁）
- 9 小原友行編『思考力・判断力・表現力』をつける社会科デザイン 小学校編』（明治図書出版株式会社2009、41頁）

- 10 3点の言語活動は、廣嶋氏が「言語活動をどう充実させるか」で述べた3点である。その3点に留意し、実践単元では具体的にどのような手立てを用いるかを検討し、単元を構想した。3点をいかに充実したものにするかが思考力・判断力・表現力の育成につながると考えた。廣嶋憲一郎『小学校新学習指導要領ポイントと授業づくり 社会』（東洋館出版社2008、190頁）
- 11 意図的に2回の見学を行った。その意図は、「観察・調査活動を複数回設定し、子どもたちが意欲的に追求できるようにするためと、『消費者』『販売店の人々』のどちらの立場で観察・調査活動を行うのかを明確に」するためである。谷田部玲生・齋藤幸之介「多様な学習活動を効果的に設定した社会科授業」日本社会科教育学会編『社会科授業力の開発 小学校編』（明治図書出版株式会社2008、25頁）
- 12 都留覚編『必備！社会科の定番授業 小学校3年生』（2010、74頁～77頁）
- 13 正式名称を「土地改良区」という。農家の組織で（全国に約5000組織）、農地の整備や農業水路の維持管理を行っているほか、住民の方と連携した地域づくりや地域農業の振興のための活動を行っている。
- 14 愛知県社会科教育研究会尾張部会『かがやく大愛知』（浜島書店2011）
- 15 パンフレットは、独立行政法人水資源機構、愛知用水管理所が発行する『あいちゃん まきおくんのおふしぎな大冒険 愛知用水の旅』と水土里ネット愛知用水の発行する『愛知用水ブック』を使用した。
- 16 愛知用水総合管理所は、愛知県愛知郡東郷町にあり、愛知県の尾張の一部から知多半島に農業・工業・水道用の水を供給する用水を管理している。見学当時、係員によれば、小学生が管理所内を見学したのは初めてということだった。
- 17 平成23年に愛知用水通水50周年を迎え、中日新聞では特集が組まれた。
- 18 『21世紀へ翔ぶ「ふるさと三好」—ふるさと三好調査研究報告書一』（愛知県三好町1999、65頁）
- 19 副読本『みよし』（みよし市教育委員会）
- 20 三好町誌編集委員会民俗部会『三好町誌民俗調査報告書 三好の民俗』（愛知県みよし市2011）
- 21 三好町誌編集委員会『三好町誌』（三好町1962）
- 22 新屋のあゆみ編纂委員会『新屋のあゆみ』（新屋行政区1998）
- 23 三好池は、愛知用水の水を三好支線から取り入れ、みよし市、東郷町の農地をかんがいする農業用ため池である。かつてあったため池を愛知用水の事業の一環として、昭和32年度から33年度にかけて建設された。昭和34年に三好池が完成し、愛知用水の通水で、待望の木曾の水が田畑を潤し、喜びと感動を町民に与えた。三好池まつりは、まちの発展の礎となった木曾の水に感謝して行われている。水の恵みに感謝して池に舟を浮かべ、その上に山型の提灯を飾り、祈願船とともに奉る大御饌調進祭（おおみけちょうしんさい）が、平成元年8月1日に行われた。これが「三好池まつり」の始まりと言われている。
- 24 アンケートは、それぞれの学年で実践前後に紙面アンケートで実施した。3年生実践では学級36名全員、4年生実践は学級36名全員に実施した。3年生と4年生ではクラス替えが行われたため、アンケートに答えた児童は、すべて同一児童ではない。